

第43号 2023.4.30発行
 発行者：株式会社コロポ
 編集者：JO編集委員会

企業が子どもと関わることは 企業の未来を考えるとということ

株式会社リトプラ セールズ・ビジネス開発

小西 恭平 さん



1983年東京都生まれ、2児の父。
 2006年、キッズニアを運営展開する株式会社KCJ GROUPに創成期より参画。学校営業部門の立ち上げを担い、事業部から本社と12年間勤務。
 2018年、スタートアップ企業への挑戦的な再転職を決定し、株式会社ブレイスホルダ（現リトプラ）に入社。デジタル技術を扱うパーク（リトルプラネット）という「場」を持つ強みを生かし、プログラミング教育やデジタルとの楽しい関わり方について、小学校や幼稚園など子どもに関わる機関との連携を推進中。
 2017年より現在まで、横浜市教育委員会はまっこと未来カンパニープロジェクト推進委員を務める。 <https://corp.litpla.com/>

江森：小西さんとは横浜市教育委員会の「は

まっこと未来カンパニープロジェクト」の推進委員で長いことご一緒させていただいているにもかかわらず、きちんとお話しする機会がなかったため、今日はとても楽しみにしています。まずは小西さんのお仕事をご紹介しますか。

小西：会社は株式会社リトプラといまして、「リトルプラネット」というデジタルとリアルが融合した遊びの空間を提供する次世代型テーマパークを運営している会社です。本来はテーマパークをフランチャイズ展開で広がっていくというビジネスモデルなのですが、ここ数年はコロナで計画していたような事業ができなかったため、私たちが開発したアトラクションのライセンス販売をしたり、キッズスペースの企画・開発をしたりというようなこともやっています。

です。

江森：人が集まれないという状況でのテーマパーク事業のご苦労は想像するにあまりあるものがあります。小西さんご自身のお仕事は？

小西：私はフロント全般といいますが、パークへの集客から法人営業まで、少人数の会社なので営業的なことは幅広くやっていますね。

江森：まさにデジタルのお仕事をされている小西さんに相談なのですが、私たちも単なる印刷からコンテンツビジネスに移行しているのですが、いまはコンテンツを紙媒体にすることで売上があがるのですが、これが紙媒体不要となったときに、デジタルコンテンツをどう展開していけばいいのかというのはすごく悩むんですね。リトプラさんの場合は、パークを作って、そこに

コンテンツを閉じ込めることで「入場料」という形で収益が上がるということですが、これからどうなっていくと思いますか。

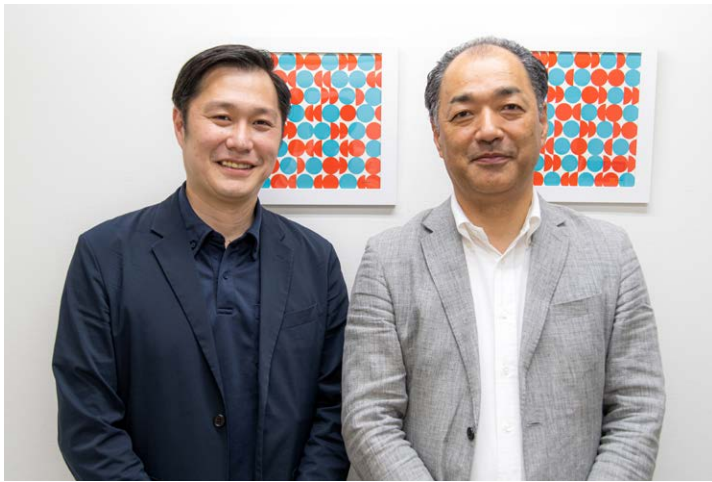
小西：確かに入場料収入というのは収益の柱ではあるのですが、やはり入場料だけでは厳しいというのは私たちも認識しています。そもそも定員の制約がありますし、ファミリー向けという性格上、平日は集客が難しいという宿命があります。平日夜を大人向けにするなどの工夫もしていますが、やはりこれからはオンラインサービスを拡充させて、それとパークを融合させていくことで、付加価値を生み出していくということを考えていますね。

江森：なるほど、リアルとバーチャルが融合することで新しい価値が生まれるということですね。

小西：そうですね、私たちの世代はアナログからデジタルに移行していくんですけど、今の子どもたちはデジタルが基本で、そこからアナログを見ているというか、かえってモノがすごく貴重で新しく見えているようなんですね。レコードを新しいテクノロジーとして認識していたり、「プリンタ手帳」や「写ルンです」が流行ったりしているそうですね。

江森：それでも昔のように「モノであふれる」という状況にはならないんでしょうから、経済縮んじやうんじやないかと心配になりますよね。デジタルが教育に与えるインパクトというのでも無視できないと思いますが、どう思いますか。

小西：僕が感じているのは、デジタル化されることによって人がやらなくていいことが増えるので、より人の良し悪しが浮き彫りになると思いますね。例えば保育園なん



かわかりやすいんですけど、これまで完全に手書き文化だった現場にデジタルが入ることによって、保育士さんが本来の保育に使える時間が増えて、保育の質が向上するという事例が出てきています。これは小学校や中学校でも起こると思いますし、保育園よりももっと効果が大きいのではないかと思います。

江森：学校のデジタル化はどんな状況ですか。

小西：コロナが追い風になって一人一台のデバイスが普及して夢のような環境はできたのですが、はっきりいって学校ってあんまりいいデジタルコンテンツないんですよ（笑）。だったらうちでやれば良さそうなものなんですけど、スタートアップの企業のスピード感と全然合わないんですよ。で

も僕は子どもは未来の象徴だと思っているので、企業が未来を考える上で子どもと関わることもつてもものすごい重要なことだと思っっているんです。

江森：昨年度の学習発表会のときに私も言いました、近年大人が忙しくなったからなのか、子どもを学校に押し付けて社会から隔離しているというか、子どもを別の生き物のように扱っているフシがあると思うんですよね。だから子どもの社会参加が遅れる、不登校やひきこもりにつながっていくんだと思います。子どもだって大人と同じ社会を生きる仲間として、一緒に社会の課題について考えることを早い段階からやっていけば、子どもは自然と社会に入っていけるんだと思うのですが。

小西：昨年東市ヶ尾小の総合の時間で、5年生にリトプラのアトラクションを企画してもらおうという授業をやったんですね。それがとても良くて、江森さんがおっしゃるようにならぬ仲間として扱っていますからダメ出しもするし、子どもたちだけでなく先生とも真剣に向き合いながら作りあげていきました。これもここで終わりじゃなくて、もっと密に関わりたいですし、今はオンライン環境も整っているのに、横浜市の小学校340校全部でやるのも不可能ではないと思うんですね。そのぐらいの規模になれば、本当に開発してパークに置くこともできるので、そうなる子どもたちの参画意識もあがるし、私たちも企業として子どもたちとの関わり方が変わってくると思います。

江森：我々は横浜市のキャリア教育プログラムである「はまっ子未来カンパニープロジェクト」に、もうかれこれ7年ぐらい関

わっているわけですが、どのように見えていますか。

小西：先日推進委員会でも議論しましたが、まさに過渡期ですね。今後どうしていくのか新たな覚悟みたいなことが求められていると思いますし、極論すればやめるという選択肢も含めて、考える節目なんじゃないかと思っています。教育委員会も覚悟が求められますし、企業側も目的を明確にして参加する必要があります。

江森：企業に対する説明が圧倒的に足りないですよ。現場の先生に説明させてもらうじゃダメだよ。

小西：それは教育委員会のWEBサイトに表れていますよね。企業はたいてい見るんだから、あそこにもっと企業に期待することとか、参加する上での方法論を書いておけばいいし、報告書の冊子もデータで見られるようにしておくべきですよ。我々推進委員ももっと名前を出していいから、企業から直接問い合わせできるようにするということです。

たぶん企業の参加のスタンスって2通りあって、理念に共感して参加するタイプと、マーケティング志向で参加するタイプがあると思うんですけど、マーケティング志向だと企業側としても結果を出さないといけないし、とはいえたぶんあのプログラムで良い結果なんて出ないし、となると結局誰も得しないというか、みんな不幸になっちゃいます。でも、主旨をきちんと説明すれば、企業側もそういうコンテンツを考えられるはずだと思っんです。

江森：まったくその通りですね。学校にそういう企業の思考の仕方がわかる人が皆無だというのが不幸なところですね。そ

えば小西さんは今年度からPTA会長さんだそうですが、PTAにも同じような課題があるんじゃないですか？

小西：ちよつと今日の午前中に役員会があったんですけど、うちの小学校は役員さんが全員仕事を持っていて人なので、必要のないことはやめようみたいな話は出てましたね。そういう意味では変わっていくんじゃないかという気はします。

江森：僕はついにPTAはやらずじまいだったんだけど、PTAこそ一回解体すればいいんじゃない？と思っんですけどね。役員だつてみんな嫌がってくじ引きだのポイント制だのつてやってるでしょ。傍から見るとそんなに嫌なことやる意味あのかね？って思っんです。

小西：PTA連合会を脱退したり、PTAそのものを外注したりしているところもありますからね。でも当事者になってみるとわかることがたくさんあって、やってよかったと思っっています。

江森：PTAの本質的な役割って何なんですかね？

小西：ひとつあるなと思っるのは、利己主義が横行する世の中で、ともすればうちの子さえ良ければと思っがちになりますけど、実は教育というのは利他の心に根差したたくさんの方のサポートがあつて成り立っていることであつて、そういう事実を強制的にでも目を向けることにつながるの、PTAの意義なのかなと思っますね。

江森：学校と社会の風通しが悪くなつてしまった現代社会において、かろうじてPTAが細いパイプを保っていると思っますので、学校を社会に開くつなぎ役として頑張ってください、会長！

東京都「社会的責任に配慮した調達に係る有識者会議」を設置

東京都は、公共調達を通じて、SDGsの理念を踏まえた社会的責任を果たすための指針（仮称）「社会的責任に配慮した調達指針」以下「調達指針」の策定を新たに検討するため、調達指針の方向性について有識者より意見の聴取を行うことを目的として、「社会的責任に配慮した調達に係る有識者会議」を設置したと、3月27日付け報道発表、4月10日に第1回会議を開催しました。

この有識者会議は、持続可能性に関わる社会的潮流や、都政が直面する課題及び都の調達の実態等を踏まえ、指針策定に向け

た方向性について有識者より意見の聴取を行うことを目的としており、東京都が指名した8名の有識者から構成されています。委員の任期が2年に設定されていることから、2年程度の時間をかけて調達指針の方向性が検討されると見られます。

公共調達については、以前から価格だけで決定する競争入札のあり方に疑問が呈されており、特に市場の縮小局面において弊害が顕著であるといわれています。市場の縮小局面では、応札業者が仕事量の確保のために無理な価格設定をしやすく、そのことが環境負荷や人権侵害を招くことにつな

がりやすいためです。全日本印刷工業組合連合会では、2017年から産業戦略デザイン室内に「SR調達研究部会」を設け、公共調達における社会的責任と、公益に資する公共調達のあり方について研究を続けていました。またPHP総研やCSOネットワーク等の民間シンクタンクにおいても、同様の研究や提言がなされており、民間での研究が先行していました。

最近では、全国中小企業団体中央会が、昨年11月の全国大会決議の中で、「官公需受注における公共調達制度（戦略的政府調達）を新たに導入し、長期購入契約の対象の拡

大などに努めること」を要望しており、公共調達における社会的責任の議論が広がりを見せています。

この流れを受けて、政府はサプライチェーン（供給網）全体で人権侵害を把握し改善する「人権デューデリジェンス」に取り組む企業を、政府調達で優遇する仕組みの検討を昨年9月から始めており、国においては人権保護の立場からの取り組みが進みそうです。

今回東京都が社会的責任に配慮した調達に関する検討を始めたことは、全国の地方自治体にも影響を与えると考えられ、今後地域の特色を踏まえた様々なスタイルでの公共調達改革が進められることを期待したいと思います。

毎日ラジオ、深夜にYouTube、週末レコード、たまにフェス

竹見正一

3月30日/木曜日/23時

小学校に上がったばかりの週末、祖父の家に一人で泊まりに行った。夕食後に祖父が、明け方に嵐がくるから満開を見ておこうと、私を近所の寺に誘ってくれた。田んぼ道を歩き山門をくぐると、真っ直ぐ延びるほの暗い参道に、街灯の淡い光を浴びた桜がぼろりと現れた。その圧倒的な白さに、とてつもない静寂を感じた。そしてその時、なぜだか散髪屋で見た絵本、百鬼夜行を思い出してしまった。太閤はんがここへ初めに植えたんや、日本の花見もここから始まったんや、と、いつもより饒舌に話す祖父の声もよく聞こえないくらい、鬼、鬼、鬼に囚われた。その白い密集の陰にいるのではないかと...

ほろ酔いで歩く川沿い。満開の夜桜を見てもあの感情は湧き出てこない。手伝いをしない子が鬼は大好き、鬼はぼりぼりと頭から食らう、と、父からビビらせられ続けていたことも、環境で植え付けられた悪習も、十二支を何周もしてどうでもよくなった。だがしかし、あの百鬼夜行だけは問答無用な感じでやっぱり怖い。静止した白い密集を見て、ぞくぞくとした自分に少しほっとした。

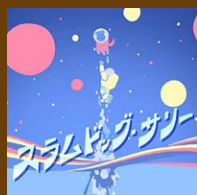


“伸びた髪が風に吹かれて
なんだかちょっと邪魔に感じただけ”
曲：どうでもいいけど (YASHINOKI HOUSE)
never young beach

4月19日/水曜日/16時

招かれた教室に入ると、僅かに大人びた彼女がいた。啓発動画制作で、アフレコを担当してくれたので、そのお礼を伝えるために専門学校を訪問。聞けばすでに専門学校は卒業していて、養成所に通っているとのこと。その養成所に入ることも難しいのに、そこから声優として事務所と契約できるのは、年間5%程度なのだそう。彼女の担当だった先生は、契約後も一事業者として毎年契約更新はあるし、日々競争の渦の中において、メンタルを強く保っているだけでも立派なのです、と話す。本人は、至って穏やかに笑顔を絶やさず頷いている。一言、やりたいことをやっていますので、と、はっきり答える彼女から、未来を見据える強い気持ち伝わってきて、胸が熱くなった。

次の仕事に向かう車内、この時間の急行は学生も増えて少し騒がしい。「週末、うちの地元のビーチクリーンイベント、一緒に行かない？そこで貰えるワカメがすごく美味しいから」休日の過ごし方、素敵。私なんて実家の店舗前清掃は大嫌いだったし、未来のことなど考えもしなかった。フレイフレー学生さん。そして確かに、採れたてのワカメは超絶うまいよね。



“霞んで見えた水平線、
二人は春の惑星へ向かうんだ”
曲：スラムドッグ・サリー
少年キッズボウイ

強固なサプライチェーン連携を目指し 協力会社訪問実施

2023年2月～4月にかけて協力会社を訪問し、「環境への取組に関するアンケート」と「情報セキュリティの取組に関する現地調査」をそれぞれ実施しました。

環境アンケートでは多くの協力会社で廃棄物の適切な処理やリサイクル、節電などへの取組が見られた一方、自社のCO₂排出量の把握や、地域での環境保護の活動に関しては取組み途上という企業が多く、法定外の取組みについてには促進していくかという課題が浮き彫りになりました。2050年カーボンニュートラルに向けて、もはや一刻の猶予も許されないという危機感をサプライヤーの皆様と共有すべく、引き続き啓発活動を展開していきたいと思えます。

個人情報保護や情報セキュリティについては、CSアンケートでも関心度が最も高い項目であり、重点的に取り組んでいることのひとつです。今回の現地訪問では実際の現場をココラボ社員が見て安全性を確認するだけでなく、協力会社の取組みから学ばせていただくことも多く、サプライチェーン全体での取組み強化につながる有意義な時間となりました。

調査にご協力いただいた協力会社の皆様ありがとうございました。



搬入口の入退室管理の様子



保護情報はヤレ紙も管理

「ご近所AEDMAP」 ありがとうの日で最新版を発行

いざという時に設置場所が一目でわかるようにと作成した近隣エリアのAEDMAPを、3年振りに更新し、ご近所のコンビニや飲食店、医療機関など、人が集まる場所を中心に配布しました。今回は配布先で掲示しやすいようにラミネート加工をし、近隣の約30カ所に配布。無意識でも繰り返し目にすることで記憶してもらえようように店舗の入口やトイレ、待合室などへの掲示をお願いしました。

AEDの設置場所は当社社員が調査していますが、前回は掲載をお断りされた施設も、今回は掲載していただけるようになることも多く、情報媒体の定期的な見直しや、繰り返し実施することの重要性を改めて認識する良い機会になりました。

また、コロナ禍の最中に入社した従業員は、当社の特色である近隣の方々との交流の経験がない者も多く、今回直接コミュニケーションがとれたこと、地域でのココラボ（協進印刷）の知名度の高さを肌で感じることで、「楽しい！」との感想も出るなどとても良い体験になったようです。新型コロナウイルス感染症も落ち着き、また地域のみなさまとの連携・交流を再開していきたいと思えます。



InterBEE2022 TILTAブースの設計・設営を担当

昨年11月幕張メッセで開催されたInterBEE2022において、中国のカメラサポートグッズ「TILTA」のブース設計及び設営を行いました。

4コマ分（約6m×6m）のスペースを、より大きく見せるために正面にフラットスペースを広く設けた大胆なブースデザインとし、製品のイメージをそのままにしたような構造とカラーリングを採用しました。

新型コロナウイルス感染症の蔓延以降、リアルな展示会の中味が相次ぎ、ブース設計は久しぶりの仕事。当日の来客数も想定をはるかに上回る盛況ぶり、活気溢れる幕張メッセに胸が熱くなりました。コロナの5類移行に伴って、ゴールデンウィーク明けからの展示会はますます活発に。出展をご検討の際は、ぜひココラボにお問い合わせください。



JO（ジェイ・オー）2023年4月号（第43号）
 発行者：株式会社ココラボ
 横浜市神奈川区大口仲町108番地
 TEL：045（431）6611
 TEL：045（431）6611
 FAX：050（3730）6273
 URL：http://www.kyoshin-pint.co.jp

